



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第一部 通史. 第四編 キャンパスの変遷. 第五章 札幌キャンパスの変容と整備（札幌キャンパス第Ⅲ期） 一九五九～一九九六年
Citation	北大百二十五年史, 通説編, 284-294
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28167
Type	departmental bulletin paper
File Information	4(5)_284.pdf



第五章 札幌キャンパスの変容と整備

（札幌キャンパス第Ⅲ期） 一九五九～一九九六年

本章では、施設拡張期（一九五九～七一年）、構内環境整備期（一九七二～八五年）、施設の更新と高層化期（一九八六～九六年）の三期に区分して筆を進める。

対象となる約三五年間で、キャンパスは高度経済成長を反映して大きな変化を遂げた。キャンパスは中央道路を基軸に北へ拡張し、研究教育施設の拡充が図られた。南は学外利用を含めた共同利用施設へ変化し、余白を埋めるように研究教育施設の拡充が行われ、最初の一〇年で、キャンパスの「図」が形成される。施設の充足を目的に乱開発的な建築ラッシュが生じ、瞬く間にキャンパスの骨格が出来上がる。続く一五年は、石油危機の影響や社会的に「環境」が問題として挙げられ、構内環境整備が行われる時代となった。同時に、キャンパスに彩りを添えた戦前の木造施設群の相次ぐ消滅や、度重なる遺跡発掘によって保存問題も持ち上がり、「地」の部分が充実された。最後の一〇年は、「開かれたキャンパス」を目指し、さらなる構内環境整備が行われるほか、国際化などの社会的要求に呼応する施設充実が見られた。また、研究教育施設が更新され、中層から高層へと姿を変えるが、施設自体にも景観に対する配慮がなされ、今日のキャンパス計画への足がかりとなった。

第一節 施設拡張期（一九五九～七一年）

この時期は戦後期の北海道大学において他に類を見ない拡張期で、理工系学生の増募や大学院の充実、教養部の

設置に伴い、木造老朽化諸施設の更新増築が課題となった。キャンパス計画の検討を目的として、一九六三年一月、七カ条による「北海道大学施設計画委員会規程」が制定され、学長、施設部長、各部署部長を中心とした施設計画委員会が、同年二月二十日を第一回として不定期に開催されるに至った。第四回（六五年十月十八日）の議事録では、議題は大きく建設計画案と環境整備計画に分かれ、以後も審議対象となっていたが、現況と長期計画がくい違いを見せることもあり、早急な施設拡充が求められた当時の状況を物語っている。

拡張期のキャンパスは平面的成長から立体的成長を遂げ、組織改革による近代化が、合理的な鉄筋コンクリート造建築物に反映された。同時に、木造建築物が姿を消し始め、「明治」の色合いが薄らいでいく。施設の外觀的特徴も様式的建築から、モダニズム建築、折衷的建築へと変化し、時代背景を伴った学内各部署の改組の混沌とした状況が、建築意匠にも反映されている感があつた。

様式的建築物として農学部本館（p.a.116）が挙げられる。一九三六年の第二期工事以来建設が中止されていたが、五一年に工事を再開し、六〇年に竣工した。鉄筋コンクリート造、地上三階、地下一階建てである。正面に塔を掲げ、水平帯により地階を基壇に見立てた、左右対称形の正面性の強い建築である。スクラッチタイルで仕上げた外觀は重厚な印象を与える。しかし、装飾など詳細まで綿密な意匠が施された様式的建築は、戦後は計画されなかった。

一九五六年九月十五日午後、中央講堂（現存せず）裏で八〇周年記念会館の定礎式が行われた。学内外の寄付により建設されたこの建物は、「クラーク会館」（p.a.121, 122）と名称が定められ五九年竣工した（クラーク会館設立に伴う寄付事業及び寄付の概要は『北大百年史』通説、四二八～四二九ページを参照）。一部鉄骨造の鉄筋コンクリート造、地上二階、地下一階建て、延べ一八五二坪である。セントラルホールを中心に、大講堂、集会室、食堂、喫茶室、宿泊室を配し、国立大学では初めての学生会館であった。水平線を強調した軽快な外觀、明解な平面

計画を持つクラーク会館は、北海道におけるモダニズム建築の嚆矢であり、「近代建築の表現を用いながら北海道の気候風土に適した建築」『新建築』六〇年二月号、菊竹清訓きくたけきよのりの論考」と好評を博した。設計は工学部の太田實である。太田は東京大学卒業、学生時代、丹下健三に影響を受けた。丹下健三は、広島平和会館陳列館（五二年）、香川県庁舎（五八年）、国立代々木競技場（六四年）、東京都新庁舎（九一年）などの設計で知られる。太田は、丹下が一等案となる「在バンコック日本文化館設計競技」（四三年）の手伝いをするなど、丹下との親交が深かったという。太田は四八年、北海道大学工学部建築都市学科設置に伴い助教授に就任、教鞭のかたわら、北海道を中心に設計活動を行ったプロフェッサーアーキテクトである。太田の作品として、札幌オリンピック村施設群（七一年）、北海道立近代美術館（七七年）などがあるほか、大麻住区計画（六一年）など都市、地域計画の分野でも足跡を残している。近代建築に関する世界的名著G・ギーデオン『空間・時間・建築』の翻訳はあまりにも有名である。

また、一九六一年、医学部附属病院（現存せず、p.129）が竣工する。低層の外來病棟に対して高層の一般病棟を配置するという計画がなされている。水平性が強調され、ガラス・カーテンウォール（非耐力壁）を用いた軽快な外観は、病院の近代化を体現した建築であった。設計は、太田實と落藤藤吉である。落藤は二五年東京帝国大学工学部建築学科を卒業し、大阪府警察技師、同建築技師を経て、二八年五月より北海道帝国大学宮城課長、戦後は文部大臣官房教育施設部札幌工事事務所長兼北海道大学事務局施設課長を務めた。四六年からの二年間は、工学部建築工学科の教授も併任した。この間、江別第二小学校（江別市、五〇年）や幌別小学校（登別市）など道内中学校の設計を数多く手掛け、戦後学校建築の改善に果たした役割は大きい。

学内施設の中で、研究教育施設が最も多く建設されたことはいうまでもない。「教官の研究と調査、学生の学習と教養の場」としての附属図書館（p.134, 585～587）が、一九六〇年を第一期として、六五年、延べ三七九〇坪で竣工する。鉄筋コンクリート造、四階建て、大学図書館に求められる機能を満たしうる明解な平面計画を持つ（附

属図書館の設立経緯は『北大百年史』通説、四二九～四三二ページを参照。全体はスクラッチタイル仕上げで、正面二層にわたる柱など垂直性の強い外観を持つ。この大柱の背後にある二層吹抜けの玄関ホールは、全面ガラス張りとなっている。また、敷地の高低差を利用し、四階建ての開架閲覧室を含む東側の棟は、採光を目的として多くの窓が穿たれ、重厚さと軽快さが同居している。西に古河講堂を控え、正門から農学部本館に至る軸線上敷地の性格を反映して、近代的手法を用いながらもキャンパスとしての景観的調和を図ったのであろう。

新制大学として再出発した北海道大学において、教養部の設置は急務であり、施設拡充も急がれた。その状況は、一九六一年のN棟の竣工を初めとして、六四年S棟 (p.a.149) 竣工までの三年間で延べ五〇四〇坪が建設され、六三年の雨天体操場 (七七七坪、p.a.127)、六八年の附属図書館教養分館 (七四三坪、p.a.150, 167)、六八年の福利厚生会館 (九七八坪、p.a.151) の竣工と教養部地区の相次ぐ施設拡充が物語っている。いずれも、経済性を優先させた鉄筋コンクリート造、中廊下型平面で、この時期に標準的な建物群であるが、中央道路に面するE棟 (p.a.128) には近代的なデザインが見てとれる。全体はタイル張りであるのに対し、南北一スパンはコンクリート打ち放し、一階部分はピロティーという柱列で解放し、上部にはブリーズトレイユ (日除けルーバー) が見られる。

教養部と並び、戦後に設置された文系学部の施設 (p.a.139) 建設も急がれた。これらの施設は一九六五年から六九年に落成を見た。当初は文系全学部の合同校舎の計画もあったが、通称「軍艦講堂」 (p.a.140) を共用とし、学部ごとのユニットを廊下で関連付ける計画に変更された。全てタイル仕上げの鉄筋コンクリート造、三～六階建て、中廊下型平面で基本ユニットを必要面積分繋ぎあわせるという、将来の増築を見越した計画として注目される。これは、当時、日本建築界を賑わせたメタボリズムグループとの関連も感じられるものである。なお、設計は、事務局施設部および北海道開発コンサルタント (現ドーコン) である。この手法は、六七年から六九年に建設された一連の医学部基礎医学実験棟 (p.a.146) にも見られ、無駄を省いた合理的な計画といえることができる。

このほかにも多くの施設が建設され、まさしく「建築ラッシュ」の様相を呈していた。工学部では、一九五四年から五九年にかけて行われた、建築工学科 (p.a.118)、冶金工学科の校舎建設を皮切りに、七一年電気工学科、生体工学科棟に至るまで全面的な建設工事が行われた。同時に、長年「白聖館」の通称で、北海道大学の顔の一つとして親しまれていた木造の旧工学部本館が消滅した。六三年から附属第二農場南東で獣医学部 (p.a.133, 136) の新築工事が始まり、六六年までに二八二六坪が完成した。六五年には、応用電気研究所研究棟 (二〇一六坪、p.a.135) と薬学部研究教育棟 (二七三〇坪、p.a.148) が建設された。また、六六年設置の歯学部でも、研究棟および褐色で水平連続窓をもつ附属病院 (p.a.147) の建設が、三四三一坪で七〇年に完成する。さらに、低温科学研究所 (p.a.152) は、六八年、理学部前から現在地に移転を完了した。

研究教育施設以外では、一九五二年以降、一二年間にわたって燃料用石炭を輸送した蒸気機関車の引き込み線が、エネルギー転換により六四年に廃止された。

以上のように、この期の大拡張により、現在の札幌キャンパスの骨格が完成したが、施設充足を最優先に掲げた計画が多くの歴史的な建築物を失わせた。

第二節 構内環境整備期（一九七二～八五年）

一九六九年に始まった大学紛争後の施設再整備と並行して、キャンパス内の環境整備が行われた。大学の組織改革に連動して、施設の新設、増設が行われた量の時代から、質の向上を求める時代へと変化した。大学紛争を機に大学改革の動きがにわかに活発になり、「環境問題」がクローズアップされた七〇年代に環境科学研究科の設置が行われたことは、このことを象徴する出来事である。また、研究教育施設の充足を新築施設によって満たした時代

に対し、遺跡や建築物の保存が課題となる。

この時期の構内環境整備は、大きく、交通問題、施設設備の充実、植栽に分けられる。まず、交通整備として、構内道路の人車分離、基幹道路、学部連絡道路、防災道と周縁駐車場が設置されたほか、クラーク像前にロータリーを設置、久しく溝川となっていたサクシュコトニ川下流を暗渠として遊歩道を設置するなど、建築物に留まらない計画も見られた。設備面では、暖房や給水設備が集中化され、札幌市の下水道の完成により共同排水溝も設置された。植栽に関する措置としては、一九七二年度から七六年度の五カ年計画で、中央道路周辺、文系校舎東側、中央ローン周辺において緑地帯の植樹や保存整備が行われた。すでに、北海道大学ではキャンパス環境整備計画について、第四回施設計画委員会から審議が重ねられおり、議事録によると、緑地計画、道路、囲障、排水、池作りの五項目が検討されていた。この審議は、後に「環境整備実施計画」および「北海道大学における環境整備について」として一九七二年十一月冊子にまとめられている。

一九七九年の学内道路舗装中に、電子科学研究所西側の中央道路および古河講堂前で、九〇一〇世紀の竪穴住居趾が発見され、工事が長期にわたり中断した。これを発端として、工事前の調査が文化財保護法に従って徹底されるようになり、現在の中央食堂前に埋蔵文化財調査室が設置された。また、現恵迪寮建設工事に先立ち、埋蔵文化財発掘調査が行われ、サクシュコトニ川近辺で発掘された遺跡は、八〇年十月、遺跡保存公園とされた。なお、遺跡の保存についての動きは、すでに第二回施設計画委員会（七二年十一月八日）において、「アイヌ遺跡」に立ち入る自動車を排除するためのフェンス設置要求にも見ることができ、その後、第四四回施設計画委員会（八四年四月十一日）において、埋蔵文化財に関して文化財保護法（第五七条の三）が確認され、文化財保護法の抜粋が資料として提出された。

遺跡の保存と同時に建物の保存や移築も相次いだ。すでに、第九回施設計画委員会（一九六八年九月十一日）に

において、四項目の議題の第二として「保存建物」の項が確認され、「明治年代竣工で特殊な建物の調査書」（六八年調べ）として九棟の建物が報告されていた。この後、小委員会を組織し審議を行った結果、第一一回施設計画委員会（六八年十一月二十七日）で、六棟の保存が決定、うち第二農場の追込及耕馬舎、穀物庫は文化財指定の見通しがついていたとある。中でも、旧林学教室（古河講堂）は、建築工学科教授会および北海道建築史委員会から、同規模の道内現存明治建築では函館市の公会堂とならび価値ある建物として保存要請がなされた。

その後、北海道大学指定の保存建物として、模範家畜房（p.a.613）、穀物庫（p.a.614）、旧昆虫学教室（p.a.620）、旧図書館（p.a.621）、旧林学講堂（古河講堂）（p.a.623）、旧農業経済学教室（p.a.028）が指定された。しかし、一九七九年四月、旧農業経済教室は焼失した。七九年八月には、附属第二農場にある模範家畜房（モデル・バーン）が国指定重要文化財に指定された。模範家畜房、穀物庫など現存する附属第二農場一連の建築物は、獣医学部や低温科学研究所の移設により、明治期に建設された他の諸施設同様取り壊しの危機に瀕したが、工学部の横山尊雄教授らの研究によりその歴史的価値が認められ、保存に至った。クラークの指導により建設された第二農場諸施設は、ツイ・バイ・フォー構法の原型である、バルーンフレーム構法が用いられており、日本建築史上でも価値ある建物として評価されている。

また、この時期は、福利厚生施設の充実も図られた。「建物充足率一覧表」（一九七一年四月調整）では、充足率が一〇〇％に満たないもの一五施設のうち、各部局施設は概ね九〇％を超えるものの、図書館教養分館（七二％）、中央福利施設（五七％）、教養福利施設（六七％）、体育施設（七〇％）、講堂（二八％）、学生寄宿舎（〇％）と福利厚生施設の充足率が低いことが分かる。

一九七七年、開学一〇〇周年を機に百年記念会館（p.a.150）が建設された。クラーク会館が学生会館であるのに対して、教職員、同窓生の利用施設として位置づけられた。当初は記念資料室、宿泊室、二〇〇〇人収容のホール

をもつ建物が計画されたが、石油危機の影響で、集会室、食堂、展示室の小規模なものとなった。設計は、太田實工学部教授である。鉄筋コンクリート造、三階建て、吹き抜けの中央ホールを中心に諸室が配置され、切妻屋根に角柱を水平に二本貫入させた褐色の外観である。同年、現在地に中央食堂 (p.a.161) も建設された。福利厚生施設は、この他、八三年、学生部北西食堂、市内七カ所に点在した寮を統合して、男子学生寮 (恵迪寮、p.a.177) が新設された。恵迪寮は管理棟を中心に、六つの宿泊棟を放射状に配した雪の結晶を想起させる形態の施設である。八三年の恵迪寮新設に伴い、閉鎖された寮のうち、旧恵迪寮は八五年に北海道開拓の村、旧有島寮 (旧有島武郎邸、一三年八月、北一二条西三丁目) に建設された和洋折衷の住宅で、六〇年から北海道大学所有) は八六年札幌芸術の森に移築保存されたことも指摘しておく。なお、旧有島寮は、当初取り壊しを決定していたが、取り壊しに反対する市民運動などに配慮し、札幌市、北海道と協議した結果、建物譲渡の上で移築保存を決定した。

一九八〇年、大学院独立研究科である、環境科学研究科 (p.a.156) の管理、研究、実験棟が新設される。敷地の集約化を図るため、鉄骨鉄筋コンクリート造が採用され、地上八階に達し、耐震面も配慮された。学内の高層化建築の嚆矢といえる。八一年新設の医療技術短期大学部校舎 (p.a.171) は、当初、現医学部附属病院駐車場の位置に計画されたが、敷地変更されたため入口方向を九〇度変え、建物計画自体は変更されずに建設された。

北海道大学では一九七六年から大学をあげて研究、教育における国際交流推進に取り組み、八二年に国際交流事業基金の創設を決定した。八五年、国際的な學術交流の場として、事務局と対峙する正門南側に鉄筋コンクリート造、二階建て、大小二つのホールを持つ學術交流会館 (p.a.176) が建設された。

第三節 施設の更新と高層化（一九八六～一九六六）

戦後、急速に拡張された施設の老朽化が問題となり、施設がより高層化して更新される。また、国際化時代を反映した施設の建設が見られるほか、「開かれたキャンパス」を目指して、さらなる構内環境整備が行われる。これまでの環境整備が、学内利用者の利便性や研究環境の向上であったのに対し、学外利用者に対する配慮もなされたという点で注目される。

第五九回施設計画委員会（一九九二年六月二十四日）において、キャンパスプランが議題に取り上げられ、二一世紀の展望、オープンスペース、キャンパス全体の整合性が課題として挙げられた。その後、九四年頃より、構内環境整備が開始される。中央ローンや工学部南側のひょうたん池（通称大野池）では、流量の減少したサクシウト二川に湧き出しポンプを設置した上で石堤を築き、散策用の木路やベンチを設ける（p.a.195）などの整備が図られ、学内外の人々の憩いの場となっている。並行して、案内板、街路灯、注意標識（p.a.197～199）が設置される。これらは学内環境保全の他、市民講座の案内や車両制限など学外利用者も対象としており、「開かれたキャンパス」の実践といえる。また、これらには、熊谷直勝北海道教育大学教授が札幌市の景観色として「シャドーグリーン」と命名した彩色が施され、構内環境整備に統一した印象を与えている。

一九八〇年代後半から留学生が急増し、受け入れ体制の整備が急務になる。このことから九一年に留学生センター（p.a.187, 188, 600, 604）が設置され、九四年、クラーク会館西側の敷地に独立した施設が建設された。中央ホールを片流れ屋根の建物が挟む落ち着いた佇まいで、褐色のタイルで仕上げられた外観は、農学部本館との景観的調和が感じられる。また、九六年には新川通を隔てた飛び地に、第一期として国際交流会館（p.a.212）が建設され、先に建設された学術交流会館とともに構内南端を学術交流ゾーンとして特徴付けている。

研究教育施設面では、老朽化施設の更新が図られたが、乱開発的に建設が相次いだ構内は、敷地に余裕がなく、施設の高層化でさらなる集約化が図られた。一九九四年には、工学部材料・化学系棟 (p.a.211)、および理学部物理・高分子学科高層棟 (二号館、p.a.182) が、いずれも鉄骨鉄筋コンクリート造で建設された。意匠面では、工学部材料・化学系棟が白色を基調とするモダンな意匠であるのに対し、理学部二号館はスクラッチタイルで仕上げられ、尖塔アーチなど様式的意匠が施されており、各部局本館の意匠を意識したものといえる。先行例として、アーチ装飾を施すなど農学部本館を意識した、九二年建設の農学部共同実験棟 (p.a.190) が挙げられ、統一感ある景観形成に寄与している。第六〇回施設計画委員会(九三年六月二十三日)では、工学部長である丹保憲仁委員から「工学部の再開発に伴い、外壁のタイルの色の協議があったが、大学全体のトータルデザインの中で整合性を考慮し、事務局で指導して欲しい」との発言があるなど、施設を含むキャンパスの調和が意図されていたことがわかる。

理学部二号館に使用されたスクラッチタイルに刻まれた条痕は、機械仕上げとなっている。スクラッチタイルとは、レンガタイルに櫛引で条痕をつけたもので、戦前期、公共建築などを中心に多く用いられた。戦後は機械生産となったため、タイルの質感の印象は異なる。

また、一九九二年、医学部附属病院 (p.a.184) が高層化されたほか、九六年、薬学部研究教育棟のファサードの改修 (p.a.206) が動物舎の新築とともに行われている。さらに、福利厚生施設として、九五年には「ファカルティーハウス・エンレイソウ」 (p.a.201) が大野池南側に、「はるにれ」 (学生食堂、p.a.217) が体育館南側に建設されている。工学部小林研究室設計の「エンレイソウ」は三つの会議室とレストラン、ギャラリーを含む施設で、全体は立方体で構成されているが、北側のレストランは曲線を描くガラス開口と片流れの屋根でまとめられ、大野池に対して緩やかな表情を見せるとともに、中央道路から奥まったアプローチを見せ、外溝計画とともに落ち着いた雰囲気醸し出している。

以上のように、この時代は緑地整備や案内看板などの構内環境整備が進む一方で、新築、更新される施設も構内環境との調和が図られて計画され、将来のキャンパス計画の骨子となった。

第六章 二二世紀に向けての札幌キャンパス形成 一九九六～二〇〇一年

本章で扱う六年間は、北海道大学が初めて総合的なキャンパス整備の計画を立案して、それに連携するように施設・環境整備を実現化していった時期である。そこで本章では、キャンパスの変遷を記述するために、施設整備を担保するキャンパスの環境整備計画の中身を見ることが、また実現したプロジェクトと計画との関係を見ることがという複眼的な視点を設定する。

この時期の北海道大学を取り巻く状況の変化は、著しいものがあつた。二二世紀を目前にして、新たな時代の進展や社会の変化に適切に対応できるように、大学院の整備拡充をはじめとする大学における教育研究の内容及組織の見直しが行われた。その中で、改革の目標となる大学の未来像を現実化するために、新しい教育研究を可能とする場をいかに整備するかが大きな課題となったのは言うまでもない。その結果が「キャンパス・マスタープラン'96」の策定であり、それに伴うキャンパス環境の整備であつた。キャンパス・マスタープランという将来にわたるキャンパスの環境形成にかかわる計画を基にして、オープンスペースをキャンパスの空間的骨格と位置づけ、施設・環境整備がキャンパスの北部も含めて全体的に展開し、様々な整備がなされていった。これには、長年の間キャンパスを南北に二分していた北一八条道路がアンダーパス化され、地上部に遊歩道が整備されてキャンパスが実質的に